

『二人の女勝負師』

池田眞也

## 『二人の女勝負師』

池田眞也

1

檜井映美ならいえいみはノートパソコンのモニターに映し出された将棋盤と朝から何時間も向かい合っていた。二日後に彼女の滞在しているホテルで女流名将戦の最終局が行なわれる。タイトル保持者の映美が挑戦者の内田理沙子をむかえうつのだ。二勝二敗でむかえた第五局。勝ったほうが次の一年間女流名将を名乗ることができると。

映美は、横歩取りよこふとどの中座飛車ちゆうざびしやと呼ばれる戦型の、その中でも最新型といわれる先手から積極的に攻撃を仕掛ける変化を研究していた。挑戦者の理沙子もつとも得意としていて、彼女に後手番をとられたらきつとこの形に誘導してくるだろうと映美は考えていたからだ。

後手番が主導権を握る横歩取り戦法は、急戦の中でも特に激しい部類に入る。次々と大きな技が飛び出す華やかな将棋になるが、その反面一手一手が厳しく、ほんの小さなミスが即負けに直結する。そのため形勢がはつきりする終盤まで研究し、対局に備えておく必要がある。

映美がまだ結論の出ていないといわれるある局面をパソコンで検索すると、過去に三度プロ棋戦で現われたことがあるという結果が出た。そのいずれの棋戦も以前に研究したことがあり、終局までの棋譜もよく覚えていた。

目に疲れを感じた映美は、ノートパソコンの電源を切ると、窓から外を眺めた。

映美のいる三階の部屋からは、ホテルの中庭にある小さな日本庭園が見える。その向こう側、道をはさんだところにマンションが立っていた。カーテンの開いているいくつかの部屋は大きな窓から中の様子を伺うことができたが、そのなかの一室が映美の注意を引いた。赤いセーターを着た二十代から三十代の女が、なにをするわけでもなくソファに座っている。

た。

どうも普通ではない。

映美はこのホテルに滞在して三日目になるが、女は何度見ても同じ場所に、同じ洋服を着て、同じようになにもせずただ座っている。眠っているわけではなさそうだ。ここからは表情は読み取れないが、食べたり眠ったりすることすら億劫になってしまふほど絶望しているのではないか、という気がするのだ。

携帯電話がなった。

「檜井です。……こんにちは。……ありがとうございます。……すぐにもまいります」

映美は新館三階に位置する部屋を出て、本館一階に降りた。明治時代に建てられたクラシックホテルの和洋折衷のラウンジには、いかにも場違いな二人連れの男が、申し訳なさそうに座っていた。くたびれたジャケットをはおった中年のほうが映美を見つけると、やっと母親を見つけた迷子のような顔をして映美に手を振った。

映美はふたりの前に立った。

「吉田先生、こんにちは」

「こんにちは、映美」と中年の男が言った。

「トシ君、こんにちは」

「こんにちは映美ちゃん」と若い男も言った。

映美は二人に対して丁寧に頭を下げた。

「本日はお忙しい中、誠にありがとうございます」

「座って」

中年の男が言うと、映美は若い男の隣に座った。

「何度来てもこういうところは、慣れんなあ」

映美の師匠である吉田和則六段と、兄弟弟子の石塚俊之が横浜まで激励に来てくれたのだった。映美はそれまでの態度とはうってかわって堰を切ったように話し出した。

「もう久しぶりですよ。人と話すの。ホテルなんか来なきやよかった。鋭気なんて家でも養えるんですよ」

「元氣そうやないか。勝てそうか」と師匠が聞いた。

『将棋のみぞ知る』ですよ」

「言うと思った」と俊之が笑った。

吉田が映美の前に大きなふるしき包みを出した。

「これ、キミちゃんからや。なんでも映美の好きなもんらしいわ」

「嬉しい。ありがとうございます。食べたかったですよ。紀美子さんの手料理。なんだろう。すごく楽しみ」

「今日も来たいって紀美子さんおっしゃってただけど、パートに穴があいちゃったんだって」

「そうそう。この間囲碁の森さんから、クリームあずきのすごくおいしいお店教えてもらったんですよ。紀美子さん絶対喜ばれると思って。ねえ、今度みんなで行きましょよ。トシ君も甘いもの好きでしょ」

「ああ。：：：あのさ、映美ちゃん」

俊之の顔が真剣になり、映美は息をのんだ。彼が何を話そうとしているのかすぐにわかったのだ。

「おはようございますう！」

二オクターブ高い声が突然割り込んできた。映美が振り返ると、吉田や俊之とは違った意味でクラシックホテルとは場違いな、イケイケでケバケバな女性がにこにこ笑っている。

「吉田一門お揃いで。今日はよろしくお願いいたします」

C S放送『S H O G I 専門チャンネル』アナウンサーの五反田孝子がカメラマンと共にやってきたのだ。映美は対局にむけてのインタビューを受けることになっていた。

五反田は学生時代に北海道から沖縄まで全ての放送局に履歴書を送ったが、一社も内定をもらえなかったという伝説を持つフリーアナウンサーで、二十八歳から四十歳の間らしいが、誰も彼女の本当の年齢は知らない。釣り番組やケーブルテレビのレポーターをしたあと、三年程前に『S H O G I 専門チャンネル』に流れてきたのだが、最初は駒の動かし方も知らなかったようで、いまだに的外れな質問ばかりしている。しかし数少ない女性の将棋関係者ということもあり、視聴者の人気も高かった。

「一門っていても三人しかおらへんよ」と吉田が笑った。

「檜井大センセーがバンバンタイトルとってくれるから左うちわじゃないですか。弟子ばかりやたら多くて、ひとつもタイトルが取れないどっかの一門とは違って」

五反田は吉田の隣に座ると、胸のポケットからメンソールの煙草を取り出して火をつけた。

「榎井ちゃん、久しぶりだね。調子どう？」

「まあまあ。いつもと同じですよ」

「あんな奴やつつけちゃってよ」

五反田は天井に向かって煙を吐くと、吉田と俊之のほうに向き直った。

「ちよつと聞いてくださいよ。この後内田理沙子のインタビューなんですよ。もう朝から憂鬱で」

「怖そう」と思わず俊之が言った。

「でしょ。ねえ榎井ちゃん、変わってくれない？」

「私ですか？ 何を聞けばいいんですか」

「『あなたはいつも私に負けてますが、どうしてそんなに弱いんですか？』って」

「内田さんは強いですよ」

やがてラウンジの隅で撮影のセッティングをしていたカメラマンが呼びに来た。映美は五反田に促されて、大きな窓の前に立った。

「じゃあいいかな」

カメラマンに言われると、五反田は手鏡で化粧をチェックした後やわらかい笑顔を浮かべ、上品な淑女に変身した。

「いいわよ。じゃあよろしくお願いします」

「よろしくお願いします」

大きな三脚に乗ったベータカムのカメラに赤いランプがともった。

「はい、まわった」カメラマンが合図を出した。

『『SHOGI専門チャンネル』をご覧の皆様こんにちは。五反田孝子です……』

## 2

「二勝二敗で迎えた女流名将戦があさって最終局を迎えます。榎井映美女流名将、五期連続防衛となるでしょうか。それとも内田理沙子三段がタイトルを奪取するのでしょうか」

道場の壁にもたれてぼんやりテレビを見ていたら、五反田が出てきた。さつきインタビューを撮影したばかりなのにと、

窓の外を見るとすでに暗くなっている。俊之は映美のほうを見ると、三人の客と同時に指す三面指しをしていた。

横浜のホテルで吉田と別れた後、映美と俊之は大井町にある師匠が師範を勤める道場に顔を出し、二人で十秒将棋をしたり、常連客の指導対局をしながら過ごした。俊之は昼間から何も食べておらず、空腹であることを思い出した。

「いよいよ最終局ですが、今の心境をどうぞ」

「どんな将棋であろうと、すべて同じ態度で臨みたいと、普段から考えています」

画面に映美が映り、数人の客が声をあげた。彼女は一瞬テレビの画面を見たが、興味なさそうにすぐに将棋盤のほうに顔を戻した。

テレビの画面にはカットバックで理沙子の姿が映された。

五反田がふたりに同じ質問をして、それを編集でつなげたのだろう。

「私の将棋人生の総決算と言えるような将棋にするつもりです」

美しさだったなら棋界で一、二を争うといわれていた。夜明け直前の夜の闇が一番暗いところから運ばれてきたような幻想的な黒い瞳と長い髪。しかし彼女の気性の激しさは有名で、誰も好んで近づこうとしない。日常生活からすでに勝負は始まっているのだといわんばかりに、世界に対して攻撃的なのだ。将棋を離れれば普通の女の子になる映美とは対照的だ。

「相手の印象を一言でいうと？」

五反田の質問を受けた映美は困ったように黙り込んだ。しばらくして首をかしげながら小さな声で「居飛車党」と言った。

俊之は大きな声で笑った。そんなことはこの道場に來ているアマチュアにだってわかる。要するに映美は理沙子のことを心の底ではライバルだとは思っていないのだ。映美に悪気がないぶん、言われたほうは傷つくだろう。理沙子のはらわたは今ごろ煮えくりかえっているに違いない。

「あなたにとって将棋とはなんですか？」

「将棋は将棋でしかありません。『将棋』として私の中にあります」

「将棋は私の全てです。将棋のためにいままで全てのことを犠牲にしてきました」

この質問に関する限り、俊之は理沙子の考え方に近かった。将棋が全てなのは自分だって同じだ。そんなことを考えていたらしばらくひそんでいた胸のあたりのざわざわがふたたび動きはじめた。

奨励会に入った頃は、才能のない先輩たちのことで自分とは関係ないと思っていたが、二十歳を迎える頃から自分自身の現実的な問題として心の中心に大きな顔をして居座るようになった。『その日』がいよいよ目の前に迫っている。将棋しかなできない自分から将棋を奪われて、社会にたつたひとりで放り出されるといふ不安。

「最終局の豊富を」

「いい将棋を指したいです。それだけです」

「榎井さんには絶対に負けません」

俊之の前に道場の席主をしている男が座った。

「いよいよ明日だな」

「ええ」

「今回は映美ちゃんよりも、あんたのことを応援してる。なんとしてもくらいつけよ」

「勝てなかつたら死にます」

明日負けたら自分はどうなるのだろう。本当にどうなってしまうのだろう。考えすぎると眠くなる。そうなったときに考えよう。それまでは将棋のことだけを考えよう。

「そんなくだらないことを聞かないでくれますか？」

画面の中の理沙子が大きな声をあげた。「休日は何をしていきますか？」という質問が彼女を不機嫌にさせたようだ。

五反田が慌てながら、次の質問に移った。

「失礼しました。ところで内田さんが今まで無冠でいる事が、将棋界の七不思議と言われていますが……」

『無冠』という言葉が気に入らなかったのか、理沙子はいきなり席を立つとスタジオから出て行った。

「なんでいつもああなの？ もう嫌だ。あの人」

五反田がカメラにむかって飲み会の席で見せるありのままの姿をさらし、道場の客からも失笑が起こった。普通だった

らこんな状況を放送しないだろう。最近雑誌もテレビも理沙子がトラブルを起すのを面白がる風潮がある。どこに行っても彼女は嫌われているようだ。

指導対局を終えた映美が、俊之のところに来た。

「お腹すいたね。なんか食べにいかない？」

「いいよ。なに食べようか」

「うーん。なんでもいいよ」

映美は小さく笑った。

映美と俊之は道場を出た後、駅近くの小さな定食屋に入った。道場の手伝いをした帰りにはよく立寄る店の一つで、店主とは子供の頃からの顔見知りだ。再開発の手から逃れ、二十一世紀になった現在でも、いまだに昭和の匂いを残している。俊之はそんな場所に居心地のよさを感じる。彼が自分のことを、時代とか世間の常識などというものからかけ離れたところで生きている人間なのだと思いきこんでいるからかもしれない。将棋をするためだけに小学生のときに一人で上京し、高校にも進学しなかった。将棋しかできない男に、みずからを追い込んだのだ。俊之に限らず将棋指しの中にはそんな生き方を選ぶ少年が少なからずいる。

俊之は豚のしょうが焼き定食を頼み、映美はさばの味噌煮を頼んだ。この店に来れば映美はいつでもさばの味噌煮を頼む。別の料理は別の店で食べる。小学六年生の秋から、ずっと同じように、同じものばかりを食べている。必ず俊之の頼んだ料理が早く出てきて、食べ終わる頃になってやっとさばの味噌煮ができあがる。映美が食べ終わるのを、待ちきれない俊之が先に帰ってしまったり、詰め将棋を解きながら時間をつぶしたりした。時々二人とも機嫌のいいときやどちらかがホームシックになった時、悩みをかかえたときや嬉しいことがあって誰かに話を聞いてもらいたいときは、考えていることや感じていることをありのままに語り合った。中学を卒業するまでふたりは吉田のアパートで内弟子として一緒に暮らした。故意ではなかったが裸を見てしまったこともある。俊之は映美のことを全て知っていた。映美も俊之のことを、たったひとつのことを除いて全て知っているはずだ。そんなふうに入門してから十一年間、俊之は映美がどんなものをど



んなふうに見えるのかを見続けてきたのだ。

「俺の誕生日覚えてる？」

「：：：十月二十六日」

「来週の水曜日で、俺は二十三歳になる」

「：：：」

「だから明日の例会で三連勝して初段にならないと、年齢制限に引つかかる」

「：：：知ってる」

「将棋界の人間として会うのは今日が最後になるかもしれない。俺は明日の励会で魂の棋譜を残すよ。だから映美ちゃんも頑張ってくれ」

「本当のこと言うと。毎日そのことばかり考えているの。私のタイトルなんてどうでもいい。：：：勝ってね。絶対勝つて」

プロ棋士を目指すものは『奨励会』と呼ばれる養成期間に入会しなければならぬ。田舎では神童とか天才と呼ばれた少年少女たちが全国から集まり、月二回三局ずつ戦い、所定の成績を治めたものが昇級、昇段する。町道場では五段、六段で指していたものも通常は六級からスタートし、四段になって初めてプロ棋士と認められる。奨励会には厳しい年齢制限があり、満二十三歳の誕生日までに初段、満二十六歳の誕生日までに四段に昇段しないと、強制的に退会させられるのだ。実際に棋士になれる奨励会員は全体の約二割だと言われている。俊之は前回の例会までにいいところから数えて十五勝七敗だった。翌日三連勝すれば初段に昇段し、一局でも落とせば棋士になる道は永久に閉ざされる。

「明日は勝っても負けても連絡しない。先生にも連絡しない。今は自分のことに集中して」

映美はだまって頷いた。

\*

翌日の例会には吉田が付き添ってくれた。千駄ヶ谷駅から将棋会館に向かう途中、鳩森八幡神社の境内を師匠と弟子は歩いた。吉田が立ち止まり、左手にある富士塚と呼ばれる小さな築山を眺めた。

「トシは東京に出てきて何年になる？」

「十一年です」

弟子が心配で対局についてくるなんて本当に不思議な人だ。そんなふうだからC級二組から一度も昇段することなくフリ丨クラスに転落してしまうのだ、と俊之は思った。

「もうそんなになるんか：：：奨励会試験の日のこと覚えてるか」

「：：：」

「大事な日だというのに、お前が映美を泣かせてなあ。映美が、もう行かんとだだこねた。ちょうどこのあたりだったんとちがうか。映美は動こうとせんし、お前はどこかに行ってしまうし」

「：：：」

「引きずるように会館まで連れて行って、どうなることかと思つとつたが、いざ対局室に入ると二人とも将棋指しの顔になりよつた。あれはおかしかったなあ」

「あのと時映美ちゃんは、僕の四間飛車しけんびしやじゃプロには通用し

ないって言ったんですよ。それで僕が怒ってしまったんです」

あの日の事はよく覚えている。どんな洋服を着ていくか迷っている映美に俊之と吉田が文句を言うと、紀美子が映美の味方になったこと。朝食のとき映美のゆでたまごを俊之が食べてしまい、その後何年にもわたって嫌味を言われたこと。

そしてあの築山の頂上で映美が大きな声で泣いていたこと。俊之は頭の中で全てを正確に再現することができた。

「トシ、今日はとにかく将棋を楽しんで来い。勝つても負けても、これがトシなんだという将棋を指して来い」

「ありがとうございます」

将棋の道を選んだことをいつか後悔することがあるかもしれない。それでもこの人に入門できたことはきつと一生大きな宝物になるだろう。

\*

第一局目。橋本三級との香落ち戦は、新早石田力戦型しんはやいしだりきせんけいで臨

んだ。序盤で作戦負けしたが、中盤に勝負手を連発して少しずつ盛り上げた。相手も粘り、終盤敗勢になったと思つたが

奇跡的に二十一手詰めを発見し拾うことができた。

第二局目。竹下初段と先手を持つての対局。相手の居飛車いびしゃ

穴熊あなぐまに、最新の藤井システムで対抗した。相手が囲いきらないうちに仕掛けたのが成功し、そのまま終盤まで押し切つて二連勝。

そして第三局目。幹事の棋士が告げた俊之の対戦相手は、先日昇級してきたばかりの渡部一級だった。あどけない坊主頭の中学一年生で、学生服の首のホックを律儀にはめている。例会のたびに名古屋から母親と一緒に上京してくるのだと誰かが馬鹿にしたように話していた。関西に所属する杉浦七段門下にもかかわらず、強いものが多くいるという理由で関東奨励会に入会したそうだ。俊之は渡部とは一度も対戦したことがなかった。

渡部の先手で対局が開始され、俊之は初めから決めていたとおり、飛車を四筋に振った。

渡部は手番になると間髪いれずに直感だけで指したが、その手に狂いはなかった。地上から北斗七星を見つけて喜んでいる俊之に対して、渡部は銀河系の彼方まで見通している。そして少年は一瞬のうちに、無数にある星の中からもつとも適切な一つを選び出すのだ。その才能は本物だった。

俊之が十一年かかってようやくたどり着いた場所に、この少年はたった二年でやってきて、そして通り過ぎようとしていた。ひとつの将棋盤をはさんで座り、学生服に名札を縫いつけた糸まではっきり見えるほど近くにいて、テレビに映る芸能人のように決して触れる事はできないのだと、少年が一手指すごとに俊之は打ちひしがれるのだった。

序盤から渡部のペースで進んだ。俊之が流れを取り戻そうと無理な攻めを仕掛けると、渡部は的確にとがめて逆に差を広げた。終盤になる頃には大差がつき、逆転の望みがない事は誰の目にも明らかだった。普段の対局だったらとつくに投了しているのだろうが、それでも十一年前の天才少年は、現役の神童にサンドバック状態にされる屈辱に耐え続けた。

俊之は△8四桂と打ち、先手の玉頭を狙った。閉ざされか

かった門を素手でもう一度こじ開けようと、爪から血を流しながら放った最後の勝負手だったが、悪あがきだと言わんばかりに渡部は桂馬の頭に銀を打った。これで先手はいつでも桂馬が手に入る形になり、唯一の攻め筋も棋譜を汚したただけだった。

俊之は形作りの手を指した。

次の一手、渡部は駒台に乗っている角を打ちおろし、後手玉を確実に寄せるだろう。

「助けてくれないか」

俊之は最後の力を振り絞って、渡部にしか聞こえない声で言った。

「：：：負けてくれ。頼む」

驚いた渡部は俊之を見た。

少年は初級者にもわかる詰め将棋をすぐに指そうとはしなかった。チェスクロックにはまだ四十分以上の持ち時間が残されていた。

3

間もなく日が暮れようとしていた。もう例会は終わっているはずだ。

映美はモニターの画面を将棋連盟のホームページに切り替え、『プロ棋戦』から『奨励会』のページに移った。夕方から何度も訪れているのだが、今日行なわれた例会の結果は更新されていなかった。

俊之はどうなったのだろう。対局の前日だというのに何も手につかなかった。吉田の家にも電話してみたが、最初に決めておいたとおりの俊之からの連絡はないそうだ。

映美は窓の外に目を移し、マンションを見た。

三階の女の部屋には男が訪れていた。

ソファに並んで座り、男は女に背を向けたままテレビを見ていた。女は男に向かって、なにかしゃべり続けている。男は女のことなどまるで相手にしないというように、テレビから目を離そうともしない。女は焦っていた。必要以上に卑屈に振舞っていた。必死であればあるほど滑稽で、それが切なかつた。

やがて耐えられなくなった女は、リモコンでテレビの電源を切り、男に対して大声をあげた。男はすぐに荷物を持って席を立ち、部屋から出て行くとした。女は男に向かつてから体全体を使って自分の思いを伝えようとしていたが、男の女に対する愛情や緊張感には、伸びきったゴムのようにもとは戻らないのだということが、遠くから見えていた映美にもわかった。

どんなに呼んでも、もう彼は戻ってこないのだ。悲しいけれども、大きな痛みがあるだろうけれども、あきらめたほうがいい。形勢を悪くしたときは、無理に逆転を狙ってはいけない。勝負手を放つべきときがくるまで、これ以上悪くしないことに全神経を集中するべきだ。今は静かに待つ。そうすれば近いうちに必ず次の幸福が現われるはずだ。

しかし女は感情に身をまかせて、最もしてはいけない悪手を選んでしまった。

女は男の持っていたバッグをひったくると、中身を床にばらまいた。男がそれをひろっている間、女は奥に引っ込んだ。ふたたび現われたとき、女の右手には包丁が握られていた。電話しなければいけない。デスクの上に置いてある携帯電話を手にとって、警察に助けを呼ばなければいけない。しかし住所を聞かれたら、マンシヨンの名前を聞かれたら、そしてだれが何をしていると聞かれたら、なんと答えたらいいのだろう。もしも自分が通報したら、女は捕まってしまうのだろうか。：：。映美はその場から動くことができなかった。むこうから自分の姿が見えるかもしれないと考えると恐ろしくなった。

女は包丁を構えたまま、男に向かつて突進していった。男と女はもみ合いになり、やがて男の左手が女の右手をつかんでいるのが見えた。女は倒れ、男は女の右手を踏みつけた。女が包丁を手放すと、男はそれを部屋が一番遠いところにむかって投げた。命の危険から解放された男は、女を何度もこぶしで殴りつけた。女は顔から血を流しながら抵抗しなかった。最後は男は女を突き飛ばし部屋から出て行った。女はうつくまわり、両手でジーンズの膝のあたりを握り締めながらいつまでも震えていた。大きな泣き声が映美のところにも聞こ

えてくるような気がした。  
映美は携帯電話を取ると俊之を呼び出した。何度もかけているが、あいかわらず電源が切られていた。何度もかけて心臓はまだ激しい鼓動をうっていた。

4

理沙子が対局場である横浜の高台に立つホテルについたのは、対局前日の午後のことだった。タクシーを降りると主催新聞社の担当者が彼女の元にかけてよってきて、簡単なインタビューをもらいたいと言ってきた。親しげな笑みが嘘っぽい。と理沙子は思った。

「そんな話は聞いていません。お断りします」  
理沙子は足を止めた。

「水：：：」  
「なんででしょう？」と担当者が聞き返した。

「水が流れてますね」

「中庭に庭園がございまして、そこを流れる小川の音じゃないですか。なかなか見事なもので、お時間がありましたら：：：」

「止めてくださいます？」

「：：：は？」

「気が散るんです。止めてください」

「：：：あの、内田さん」

担当者が呼ぶのを無視して、そのまま自分の部屋に入った。理沙子は持ってきたファイルから雑誌の切抜きを取り出し、それらをよく見える場所に一枚ずつ張っていった。今年の『将棋世界』四月号のグラビア、天童桜花戦で理沙子が映美に挑戦し、○勝三敗で敗れたときのものだ。

あのとときの理沙子は棋力が充実していて、天童桜花戦の直前までの成績が十三勝二敗だった。その中には映美との対戦、四勝一敗も含まれていた。研究にも余念がなかった。映美の棋譜はデビューしてからすべてのものを並べ、映美の指しそうな戦型は徹底的に洗った。自分は勝つものだと、心の底から信じていた。

しかし惨敗だった。相手は普段どおりの将棋を指したにも

かかわらず、理沙子は一勝もすることができなかつた。映美との対戦成績は決して悪いものではない。星取表だけを見れば互角に近いものを残している。それなのに肝心な対局では一度も勝つたことがなかつた。

将棋世界のグラビアには理沙子だけを映した写真も掲載されていた。悔しさを隠そうともせず、うなだれたまま感想戦をはじめようとさえしない。そんな非礼で無様な姿を日本全国にさらしてしまつたのだ。

なぜ負けたのだろうか。

その問いについて、理沙子はひとつの答えにたどり着いた。「自分は結局弱いのだ」と。

毎日十時間以上将棋盤の前に座っている、序盤の変化については映美よりも遙かに研究している、映美の棋風も知り尽くしている。しかしそれだけなのだ。努力だけではどうにもすることができない、生まれたときにすでに決まっている器の大きさというものがあるのかもしれない。自分と映美との間に立ちふさがる壁を越えようとすればするほど、彼女との器の違いを認めざるを得ないのだ。

しかし人間の全ての能力は生まれた後に身についたものである。その考えを理沙子は今でも捨てていなかった。

理沙子と映美が初めて対戦したのは十八歳の時だった。楯井映美の顔と名前は子供の頃から知っていたが、理沙子は関西奨励会に所属していたために、関東の奨励会員と将棋を指す機会がなかつたのだ。

十七歳のとき四段にはなれないと父親が判断し、理沙子は半ば強制的に奨励会をやめさせられた。女流棋界に移った理沙子は水を得た魚のように理沙子は勝ちつづけ、一年目で女流王将戦の挑戦者になった。二勝三敗で破れたものの、内田理沙子の時代がまもなくやってくるのだと誰もが予感した。

しかし理沙子がトップに上ることはなかった。翌年映美が関東奨励会を退会し、女流棋士になつたからだ。

映美は十六歳で三段昇段を果たし、女性初の四段誕生は確実と思われていたが、父親が亡くなつたために経済的な事情ができ、すぐに収入を得られる女流棋界に転身したのだ。

理沙子を含め、映美に適う女流棋士はいなかつた。一年も

しないうちに映美がほとんど全てのタイトルを独占するようになった。その後も映美の活躍はめざましく、男性棋士相手にも抜群の勝率をおさめている。順位戦に参加することができないため、名人になることはできないが、女流棋士の参加できるその他のタイトルだったら十分に狙えると言われている。

理沙子は映美に対して異常なライバル心を燃やした。実績的には映美と理沙子に差はあったが、対戦成績は互角に近かった。しかし、肝心な対局はことごとく映美が勝った。

夕方、検分が行なわれ、対局が行なわれる本館三階の和室と、使用する盤と駒をチェック。その後関係者を集めて前夜祭が行なわれた。毎回よほど辞退しようと思うのだが、対局者が欠席することが許されるはずもなく、いつものようにあたりさわりのないスピーチをしたあと、食事にも手をつけずそそくさと自分の部屋に戻った。

翌朝は早めに起きて杉浦からの電話を待った。カーテンをあけると大きなマンションが邪魔して海も港も見ることができない。これならばなにも横浜でなくても将棋会館でよさそうなものだが、いずれにせよ自分は将棋を指すためにここにいるのだ。そんなことはどうでもいい。

七時にロビーで杉浦と落ち合い、一緒に朝食をとった。彼は理沙子の兄弟子であり現在七段。昨年順位戦で昇段を果たし将来を期待されている若手棋士である。

短く刈り込んだ頭に、洗いざらしの白いシャツ。山に登るのが唯一の趣味で太い腕が裾をまくったところからのぞいている。見た目も中身も修行僧のようだと理沙子は思う。

「どうだ、調子は」

「昨日はよく眠れました」

「どんなふうに戦うつもりだ？」

「序盤から飛ばします。時間がなくなると終盤で逆転されることが多いので、研究しているところはノータイムで行くつもりです」

杉浦を前にするときには、いつもはけんか腰で臨むのだが、今日の理沙子の心は今までになく静かで穏やかだった。

「対局の前にひとつだけ言っておきたいことがある」



「はい」

「これからお前が対峙するのはタイトルじゃない。櫛井でもない。目の前には将棋だ」

「……」

「将棋は将棋でしかない。惑わされるな。将棋だけを見る」

理沙子はオレンジジュースを一口飲んだ。

「そういう下らない精神論を言うためにわざわざ東京まで来たんですか？ そんな時間があつたら詰め将棋の百題でも解いたらどうですか？」

誰も知らないこの人の秘密を私は知っている。私がそれを知っていることはこの人は気づいている。

5

淡黄色の無地の振袖に、濃淡が鮮やかな茜色の袴。映美は紐の結び目を左側に作ると、姿見に映った自分を見た。いつもどっつたらここで無の状態になることができた。しかし今日はどこか浮き足立っている。

備え付けの電話でボーイを呼び出し、待つ間もう一度将棋連盟のホームページにアクセスした。俊之がどうなったのか対局の前にどうしても知っておきたかったが、相変わらず奨励会のページは更新されていなかった。

まもなくボーイがやってきた。

「何かご用でしょうか」

「申し訳ありませんが、これを預かってもらえませんか」

映美は彼にノートパソコンと携帯電話を渡した。対局中外部と連絡を取り合うことを禁止する規則はないが、映美は対局のときは習慣として疑われる可能性のあるものを身の回りには置かなかつた。

八時四十五分に新館三階の自分の部屋を出る。本館三階に対局室があり、入口で草履を脱いだ。理沙子はまだ来ていなかった。中に入ると一斉にフラッシュがたかれた。主催新聞社の担当者、その他のマスコミ、ホテルの関係者、二人の立会人の棋士と記録係。映美は彼らに挨拶を交わした後、床の間を背にして座った。

「その着物一人で着たの？」

将棋雑誌のカメラマンが話し掛けてきた。

「当たり前じゃないですか。春にも同じこと聞きましたよ」

映美が笑うと彼はシャツターを何回も押した。最初から映美のそういう表情が欲しかったのだろう。

「今回はあっちも和服で臨むそうだよ」

「え？ 珍しい」

「いまごろ帯のしめ方がわからなくなってるんじゃないの」

女流棋士が対局で和服を着ることはそれほど多くない。理沙子の和服姿は映美も見たことがなかった。

「内田さんだったら何を着ても似合いますよ」

大きな窓から外を見た。数年前までは横浜の港が一望できたそうだが、いまではマンションに視界を遮られている。三階の女の部屋に目を移すとカーテンがかかっていた。

対局室の襖があげられると、一瞬のうちにその場の空気が冷たいものに変わった。友禅流しの文様の入った藤の色留袖と青紫色の袋帯に身体をつつんだ理沙子が入ってきたのだ。

映美のときと同じようにフラッシュがたかれ、おはようございまずと関係者から声がかけられるが、理沙子は彼らに一言も返さずギヤラリーを避けながら部屋の中を大きく回った。

理沙子が歩くときには、搾りたての牛乳のように白い足首がときどき見え隠れするものの、音はまったく聞こえない。ただ畳の、理沙子の白い足袋を受け止めたところだけが、若干その形状を変えるだけだ。腰から下のラインはまっすぐとしなやかに伸び、その奥には細くて長い二本の足が隠されているのだろう。理沙子が映美の前に座ると、そこはかとなくいい香りがした。なんとという香水なのかわからないが、理沙子にふさわしい匂いだと思つた。

理沙子は腰に差した扇子を座布団の横に置いたり、バッグから時計や水のはいたペットボトルを出していった。微塵の無駄がない所作を映美がぼんやりと見ていたら、顔を上げた理沙子からにらみ返された。映美は視線をそらして駒袋の紐をほどく。四十枚の駒がカタカタと将棋盤の上に落ちた。

まず上座に座る映美が右手で『王将』おうしょうを五九に、次に挑戦

者の理沙子が左手で『玉将』を5-1に置く。源兵衛清安書の彫埋駒を人差し指と中指ではさむと、指先に吸いついてそのまま体の中に入り込んでくるような錯覚をおぼえた。それをひゅうがさんかや日向産櫃で作られた将棋盤の上に打ち下ろすと、省略を重ね必要最小限の音だけを使って奏でられるアコースティックの音楽のように、木と木がぶつかり合う音が優しく繊細に響く。二人とも『金将』『銀将』『桂馬』『香車』と大橋流にならって駒を並べていった。

駒を並べ終わると記録係の少年が映美の『歩兵』を五枚取ると、床に広げられた白い布の上に投げた。『歩兵』が三枚『と』が二枚で映美が先手で指すことに決まる。やがて九時を迎えた。立会人の棋士が「でははじめてください」と合図を送った。

「振り駒の結果檜井女流名将の先手に決まりました。持ち時間は各三時間。それを使い切りますと一手六十秒未満で指していただきます。それではよろしくお願いいたします」と記録係。

映美と理沙子はともに「よろしくおねがいいたします」と頭を下げた。

映美が▲7六歩と角道を開け、指はしばらくの間駒から離さなかった。記録係はいったん時計を止め、カメラマンたちが映美の指先を狙ってシャッターを押す。一段落すると立会人の「再開してください」の声と共に、記録係は再び時計を動かす。立会人と記録係以外の関係者は退出し、いよいよ二人の対局が始まった。

やはり行かないほうがいいと俊之は思った。次の駅で降りて映画でも見ようか、それとも鎌倉まで足を伸ばして海を眺めようか。とにかく数日たつて落ち着いた頃に連絡を取ろう。映美のほうから連絡をくれたらそのときでもいい。二人だけで会って、そのときに伝えなければいけないことを全て話そう。

そんなことを考えているうちに横浜まで来てしまった。ホテルの一階のロビーに置いてあるテレビからは、『SHOGI 専門チャンネル』が流れている。女流名将戦の大盤解説場が映っている。

「女流名将、榎井映美、二十二歳。北海道出身、吉田和則六段門下。対しまして挑戦者、三段、内田理沙子、二十二歳。愛知県出身、板倉進之助九段門下」

五反田の司会で今日の対局が中継されていた。俊之は隅に置かれたソファの端にしりをすこしだけ触れるように座った。

「いよいよ第二十四期女流名将戦の第五局が始まります。解説は花岡源一郎九段です。先生よろしくお願いいたします」

「よろしくお願いします」

「二勝二敗で迎えた最終局ですが……」

「現在女流棋界は榎井さんの時代がずっと続いていますが、相変わらず強いですね」

五反田が二人の対戦を表にしたテロップを出した。

「そうなんですよね。ちよつとこちらをご覧いただきたいのですが内田さんは平成X年十七歳でプロデビュー、対して榎井さんは翌年十八歳でプロデビューしました、ふたりの対戦成績は榎井さんの二十四勝十七敗とほぼ互角と言ってもいいと思うのですが、タイトル獲得を比べると榎井さん十二期に對して、なんと内田さんは一度もタイトルを取ったことがないんですね」

「それを知ったときは本当に意外でしたね。決勝五番勝負までは何度も駒を進めているのに、肝心なところでことごとく榎井さんに敗れているんですね」

「今日はまたこの隣の部屋には控え室が設けられまして、長居五段を始め、棋士の方々が続々と研究陣に加わっています」

長居なら子供の頃からよく知っている。ほかにも知り合いが来ているのかもしれない。

「また内田三段の応援でしょうか。杉浦七段の顔も見えます。控え室の情報も随時お伝えしていきます」

杉浦七段が来ていると聞いて俊之の心はさらに沈んだ。やはり自分はここにいるべきではない。

ロビーにはテレビがついているだけで、ほかに客は一人もいなかった。ときどき関係者が通りかかると顔を伏せながら、それでも俊之は席を立つことができなかった。対局室のある三階や、控え室と大盤解説場のある二階では棋士やマスコミ、そして一般客が祭りのほじまりに心を躍らせているはずだ。同じ建物の中にいるのに、自分のいる場所だけがひっそりしている。彼は学校の下駄箱に何ヶ月も置き去りにされているビニール傘になったような疎外感を感じた。はじき出されたのに、それでもまだぶら下がろうとしているようでもみっともない。

対局が開始された。映美の初手は予想通りの▲7六歩。

そして二手目。テレビ画面の上のほうから、理沙子の白くて細い左手が伸びてきた。飛車先の歩をつかむと、それを静かに一つ前に進めた。△8四歩。

「まさか……」

二階であがったどよめきが俊之の耳にも届いた。

「ほお、△8四歩ですか。これは意外ですねえ」

テレビの中で花岡が驚いたように言った。

聞き手の五反田だけが、何が起こっているのかわからず、海外で道に迷い自分のいる場所がわからなくなった観光客のように唾然としている。

「どういうことですか？」

「ようするに内田さんは、檜井さん相手に矢倉で挑もうというわけです」

花岡の解説を聞いて、やつと五反田も理解できたようだ。

「矢倉！ 将棋の純文学ですね。最もオーソドックスな形です」

「内田さんは第一局と第三局で中座飛車で快勝してますから、

今回も後手番を持ったら横歩取りよしふとりに誘導するというのが大方の予想だったのですが……

「真つ向勝負ということですね」

「そうですね。内田さんは自分の得意とする激しい将棋を選ばずに、敢えて檜井さんの得意とする矢倉を選択して、真正面からぶつかろうとしています」

三手目、映美、ノータイムで▲6八銀。

「当然檜井さんも受けて立ちますね。間違いなく矢倉になるでしょう」

将棋の戦い方は、急戦と持久戦の大きく二つにわけることができる。お互いに玉をしつかり囲う戦い方を持久戦といい、そのなかでも矢倉は最高峰といわれている。守りを固める前に戦いを起す急戦では、実力が下の者でも自分の土俵に引き込んで相手に力を出させずに敵玉をしとめることもよくあるが、矢倉のような将棋では本当に実力のあるものが勝負を制する。

理沙子は本気だ。いままでにならないほどの気迫で臨んでいる。俊之は立ち上がり、階段を昇った。この将棋だけはちゃんとこの目で目撃しておかなくてはいけない。

\*

控え室に入った時、誰も俊之の方を見なかった。気を使っているのか、それとも誰も興味がないのか判断できなかった。彼は壁際の誰の邪魔にもならないようなところに座った。

部屋の中が沸いたのは理沙子が二手目を指したときだけで、すぐにリラックスした雰囲気に戻った。まだ序盤の駒組みの段階なので、形勢が激しく動くのはまだまだ先になるからだ。囲碁やマージャンで遊ぶもの、新聞を読んだり昼寝をするもの。記者たちはそれぞれ好きなように時間を潰し、研究のために集まった四人の若手棋士も、将棋盤を囲んではいるものの雑談をしていた。ただ一人杉浦七段が、研究陣に加わらずモニターを見つめていた。話し掛けなければと俊之は思ったが、そんな勇氣はなかった。

「石塚……」

二人の棋士が俊之の前にやってきた。俊之は恥ずかしそうに笑顔を返した。

「お前ら頑張ってるな。先月の将棋世界見たよ」

現在は五段になっている長居と、四段の両国だった。十一年前の小学生名人戦準決勝、俊之と長居が対戦して俊之が勝った。その秋に奨励会に入会した同期の中には両国もいた。

長居が静かに口を開いた。「残念だったな」

「ああ……。渡部って奴はすごいぞ。いつか羽生先生とやるんじゃないかな」

「北海道帰るのか？」両国も言った。

「そうだな。むこうで仕事探すよ」

「俺も一回札幌行ったことがあるけれどさ、寒さが半端じゃないよな。骨から凍るっていう感じで」と長居が笑った。

「じゃあ元気でな」

「頑張れよ」

長居と両国はそれぞれ右手を差し出し、俊之はそれらを握った。

「ありがとう」

俊之は二人から研究陣に加わることをすすめられたが丁重に断った。何年もろくに話していなかったものが自分の出身地を覚えていてくれたことが、少しだけ嬉しかった。

\*

理沙子の指し手は伸び伸びしていた。一瞬の間隙について積極的に仕掛けたあと、味のいい手を次々と指し、ポイントを稼いでいった。中盤を迎える頃はまだ若干ではあるが、理沙子のほうが指しやすいのではないか、というのが研究陣の一致した意見だった。

控え室には『SHOGI専門チャンネル』の用意したモニターの五反田、大盤解説場に集まった一般客、そして放送されている画面を映し出していた。一心不乱に盤上を見つめる理沙子に対して、映美は何度も天を仰いだり、窓から外を見たりしている。いつもの映美ではないことが、俊之にはよくわかった。小手先のテクニクで、差を広げられないようにしているだけだ。

考えをまとめることができなかつたのだろう。映美が席を立ち対局室から出て行く姿がモニターに映った。しばらくすると控え室の襖が開き、映美が入ってきた。

「檜井来た」

棋士の一人が合図を送ると、三面あつた将棋盤がいつせいに崩された。検討している局面を対局者に見せないためだ。

映美はすぐに俊之を見つけて、かけよつてきた。

「トシ君」

「よお」

映美は体温を感じられるほど俊之に顔を近づけてきた。透き通るような瞳が不安そうに揺れている。

「どうだった？ 昨日の例会」

俊之は周りを見た。こつちを気にしているものも何人かいた。

「：：：勝ったよ。三連勝」と映美にしか聞こえないような声でささやいた。

映美のこわばっていた顔がほぐれた。

「昇段！ やったね、おめでどう」

映美は両手を差し出すと、俊之の両手を強く握った。柔らかい手だった。映美はそのまま身体を近づけて、幼い子供が甘えるように頭を俊之の胸にぶつけてきた。髪の毛が一瞬俊之のあごにかかる。洗った髪の毛の香りがした。そんなふうにいづたって無防備だから：：：。

「ずっとそのことばかり考えてたんだよ。携帯の電源切つてたでしょう。昨日眠れなかつたよ」

「いいよ。そんなに大きな声で言わなくても」

「終わったらさ、先生と紀美子さんとお祝いしよ」

「映美ちゃんが勝つたらな」

「：：：おめでどう」

「俺の事はいいからさ、自分の対局に集中しなよ」

映美は部屋から出て行った。俊之はぼつが悪そうに周囲に頭を下げると、杉浦と目が合った。俊之が会釈をすると、むこうも頭を下げた。

モニターに顔を戻すと、映美が対局室に戻ってきた。正座をし、背筋を伸ばし、目を閉じた。しばらくそのまま動かかな



かったが、やがて精神統一ができたのか、彼女は▲3七銀と指した。それを見た研究陣の棋士たちはあわてて駒を並べなおした。誰もその手を予想していなかったのだ。

「この手はいったい何ですか？」  
大盤解説場の五反田が花岡に聞いた。

「何でしょうねえ：：：」

花岡は盤をにらんだまま考え込んでしまった。

「出たか、櫛井の妖しい手」

研究陣の棋士からも声があがった。

受けるでも攻めるでもなく、戦いの起こっている場所から離れたところにある駒を動かした。しかも前進して敵陣に迫るのではなく、一旦4六に繰り出した銀を元の位置に戻しただけの、一見パスしただけに見える手。

俊之は思わずこぶしを握りしめた。2八の飛車にひもをつけながら、角道を敵陣に直射させる攻防の絶妙手。やはり映美は映美だ。理沙子なんかに負けるわけがない。

7

▲3七銀は理沙子も予想していなかったが、それがどんな意味を持っているのかは、指された瞬間に理解できた。

彼女は当初次のように読んでいた。六筋から仕掛けると、九手先に△3九角成と敵陣を突破し、龍馬を作ることができ

る。理沙子の龍馬は今後攻防に大きな力を発揮して、先手陣に計り知れない脅威を与えるはずだ。しかもそれが2八の飛車に当たるため、映美は飛車を逃げる一手。手番を理沙子が握り、9筋からの端攻めや8筋からの玉頭を狙った攻めで一気に優勢になる、と。

しかし映美が▲3七銀と指したことにより、△3九角成のときに手抜きをすることができ。つまり例え次に△2八馬と飛車を取られても、▲同銀と角を取り返せるのだ。映美は飛車を逃げる手かわりに、▲2五桂馬以下、銀将、香車、そして▲3七銀によって道が開かれた角行で1三の地点。つ

まり理沙子の玉の一番近いところに殺到してくるだろう。

この激しい攻め合いを選べば、理沙子の負けになることは明らかだった。対局開始から全神経を研ぎ澄まして、やっとのことでかすかなアドバンテージを築き上げたのに、たった一手で逆転されてしまった。

理沙子は席を立ち、対局室から出ると階段を二階に降りた。人がいないのを確かめて控え室の前を通り過ぎ、新館に向かった。自分の部屋まで戻るつもりだったが、耐えられなくな

り途中にあった洗面所に入った。個室に入り、ドアをロックした。ひんやりと冷たい空気と、かすかに流れている水の音が興奮している心と体を癒した。音楽は遠くで鳴り響いている。

ここなら大丈夫だ。

理沙子は両手で便器を抱えると、その中に激しく嘔吐した。昨日の夜から今日の朝にかけて食べたものは全て吐いてしま

い、消化されていないものがなくなると体中をめぐりだすように胃液が溢れてきた。さらにこれでもか、これでもかと得

体のしれない液体が次々と出てくる。

人間の体は一体どれほど無駄なものを抱え込んでいるのだ

ろう、と彼女は妙に冷静な気持ちになった。対局のときはい

つもこうだ。もう苦しいとも思わない。これは儀式なのだ。

『理沙子、落ち着いて』彼女は自分に語りかけた。

簡単に勝てる相手ではないことは最初からわかっていたはずだ。いつもならここで自分から崩れてしまう。今が一番苦

しいときなのだ。ここをくらいについていけば、終盤で必ずチ

ヤンスが訪れる。

彼女はいったん自分の部屋に戻り、念入りに歯をみがいた

あと、本館に戻った。控え室の前を緊張しながら通り過ぎよ

うとすると、襖が開き中から杉浦が出てきた。そして彼女を

見つめた。  
一番顔を見せたくない人に会ってしまった。  
理沙子は杉浦から目をそらしたまま通り過ぎ、階段をのぼ

っていった。

理沙子は映美の挑発には乗らず、△2四銀と一旦受けにまわった。それに対する映美も▲5七角と自陣を整えた。

俊之は思わずうなつた。映美が一本取つたと思つたのに、これで形勢は再び互角になった。今日の理沙子はいつもと違う。

「内田さん落ち着いてますねえ。おそらくこれが最善手でしよう」

「両者譲らない大熱戦ですね」

テレビの中では五反田が、どこまで局面を理解しているのか疑問だが、興奮気味で話している。

「対局者の思いが伝わってきて、どちらにも勝たせたいですね」

どちらにも勝たせたい、という五反田の言葉を聞いて、ところどころから笑い声が起こつた。

「大変残念ですがここで皆様とはいったんお別れして、午後三時から第二十四期女流名将戦第五局の中継をお送りいたします。それでは再びこのチャンネルでお会いしましょう」

放送の画面がコマーションに変わつた。

「では十五時放送開始です。よろしくお願いします」

A Dの声が聞こえたと思うと五反田が「お疲れ様です」とひらひら舞うように控え室に入つてきた。

「孝ちゃん、来たねえ」

棋士のひとりが声をかけると、五反田は研究陣の輪の中に座つた。

「ちよつとは将棋強くなつた？ 矢倉、知つてたんだ」

「将棋の純文学なんて言うからびっくりしたよ。昨日定跡書読んだんじゃないの？」

五反田をからかう声がたたみかけるように飛んできた。

「うるさいわねえ。あんたたちもうちよつと強くなつて、たまには私から取材されてみなさいよ」

五反田はテーブルにおいてあつた誰かのセブンスターをみつけると、中から勝手に一本取り出した。

「もうわよ」

隣に座つていた若い棋士が、さつと彼女の煙草に火をつけ

た。

「ねえねえ、本当のところ、どっち勝ってんのよ？」

「互角じゃねえか」

「檜井が貫禄みせてるけど、内田もくらいいついてるよ」

五反田は将棋盤に身を乗り出してきた。

「がんばれナライ！」と力をこめて言うのと、周りから笑い声が沸いた。五反田が理沙子を嫌っていることは誰もが知っていることなのだ。

「いいのか、アナウンサーがそんなこと言って」

「内田の玉がト<sup>ぎよく</sup>ン死する順とかないわけ？」

「いきなり詰みかい！」

「見つけなさいよ。あんたプロでしょ」

「そんなめちやくちやな」

やがて十二時を迎え昼食休憩のために対局は中断された。いつのまにか杉浦が控え室からいなくなっていた。

9

彼はさつきから竹垣の外側に立ち、日本庭園の中に咲くフユザクラを眺めている。本当はこちらを伺いながら話しかけられずにいることはわかっていたが、杉浦は気がつかないふりをして、池の鯉に餌をやりつづけた。彼に対してどんな態度でのぞめばいいのか、杉浦にも自信がなかったからだ。

彼を見ていると奨励会の同期の顔が思い出された。同じ夢と不安を持ち、十代の大半を共に分かち合ったかけがえのない親友たちは、杉浦を残して皆挫折して彼の前から姿を消した。いまでは年賀状のやり取りをしているものもないし、アマチュア棋界で活躍しているという話も聞かない。

やがて意を決した彼は、いかだ打ちの飛石の上を歩いて杉浦のところへやってきた。

「杉浦先生」

杉浦は顔を上げ、緊張した面持ちで立っている俊之を見た。

「石塚君、だったね」

「ご無沙汰しています。よろしいでしょうか」

「どうぞ」

杉浦は座っていた木のベンチの端に寄りスペースを作ったが、俊之は座らなかつた。

「渡部君は先生のお弟子さんなんですね」

「保育園の頃から板倉先生の道場に通っていた子なんだ。それで僕が面倒を見ることになった」

「強いですね。僕とはものが違う」

「うちの入門はね、棋士の数は多いけれど、今まで誰もタイトルを取ったことがないんだ。もしも僕や内田が取れなかつたら、渡部が最初のタイトルホルダーになるかもしれない」  
「どんな生き物のなかにも強いものと弱いものがある。餌をなかなか取ることができない体の小さな鯉に向かって餌を投げたが、俊敏な別の鯉に横取りされてしまった。」

「僕は渡部君に対して、許されないことをしました」

「：：：」

「負けてくれと頼んだのです」

「渡部から聞いた。勝負師として、絶対に口にしてはいけない言葉だよ」

杉浦は責めるでもなく、静かな口調で言った。

将棋を指すことは労働ではない。それでも真剣勝負に金を払ってもいいと考える人々がいて、棋士という商売が成立している。だから棋士はどのような対局であろうとも、目の前の局面に全身全霊をこめて対峙しなければならぬ。確かに奨励会員の棋譜は人目にも触れなければ、ギャランティも発生しない。しかし勝負師の末端である以上、勝敗に人為的操作を行なったものはその存在理由をなくすのだ。

「すみませんでした。後悔しています」

俊之はいつまでも頭を上げなかつた。

杉浦は立ち上がり、俊之の正面に立った。

「ありがとう、謝ってくれて。渡部も少しは楽になると思う」

「話はそれだけです。失礼します」

去っていくこうとする俊之を杉浦が呼び止めた。どうしても言っておきたい事があつたのだ。

「石塚君」

俊之は立ち止まって振り返った。

「君にひとつ頼みがあるんだ」

「なんでしようか」  
「奨励会を去っても、将棋をやめないでくれなにか。将棋なんて何の役にも立たないと思うかもしれないが、必ず君のこ  
とを救ってくれる」

「……」

「将棋はいいよ」

俊之はしばらく考えてからその質問に答えた。

「考えておきます」

俊之は背を向けると逃げるように去っていった。

10

午後一時になり、立会人が対局の再会を告げると、止められていた時計は再び動かされた。まず映美が理沙子に手を渡した。このあたりで戦いを起すのか、それとももうしばらくゆつくりと様子を見るのか、どちらを選ぶのか理沙子に伺いを立てたのだ。

すると理沙子は猛攻を仕掛けてきた。縦と横にどこまでも進む飛車、斜めにどこまでも進む角行、このふたつの大駒を

援軍にして、銀将、桂馬、香車が次々と映美の玉をめがけて

迫ってくる。8筋にいた飛車は5筋、9筋と揺さぶりをかけ、思わぬ方向から思わぬ駒が飛んでくる。遊び駒は一つもなく、1筋から9筋まで盤上を広く使った理沙子の独創的な攻撃を、映美は正確に受けた。一つでも間違えれば、即負けに直結する局面を、これしかないというギリギリの受けでしのいでいった。

理沙子はその細くて長い人差し指と中指に駒をはさんで盤に打ちつけると、映美はまるで体中の毛穴が開いてしまうのではないかという錯覚を覚えた。

映美は逃げるガゼル、理沙子はライオンになって、その引き締まった足に牙を突き刺そうとしている。少しでも立ち止まれば、映美の肉付きのいい太ももは真っ赤な血で染められることになる。細くて暗い道を力尽きそうになっても全力で走る。脇にそれることもできず、無数に別れ道がある。間違

えた道を選んだらそれは死である。ライオンの吐息が映美の後ろ足にかかる。自分は生きている。一分後には死んでいるかもしれないが、まだ生きている。恐怖はやがて理性を超え、恍惚に変わった。頭からつま先まで全ての器官が、ネガティブな細胞さえも麻痺してしまふ。それは究極の快感。

「強い。いままで指した誰よりも強い」

理沙子は桂馬を捨て、角行を切り、飛車を成りこんできた。それでも映美は決定打を与えない。

映美は精一杯理沙子にしがみついていた。完全に身を任せてしまうことで、高いところに連れて行かれるのだった。

三時を迎え『SHOGI 専門チャンネル』の午後の中継が始まるころには、中盤から終盤に差し掛かるところだった。若干内田指しやすいが、まだ形勢は不明、というのが控え室の一致した意見だった。

持ち時間は映美は残り五十一分、理沙子は六十二分。映美が長考に入った。

理沙子の攻めをしのぎながら映美も後手陣に龍王りゆうを作った。理沙子はそれを受けずに歩をぶつけてきた局面。ここで歩を取って相手に応じるか、それとも手抜きして攻めに回るか、応手は二通りあったが、相手の言いなりになるような前者の展開はあまり考える気がしなかった。映美が迷っているのは攻め合いに出たとき、十一手先の局面だった。それまで若干の変化があるものの、ほぼ一本道に進むだろう。そこで指される手が勝負を左右することになる。

その局面で考えられる手は三通りあった。

① 持ち駒の金を自陣に打ち込んで、相手の攻めに備えて守りを厚くする。映美は直感でこの手が浮かび、本筋として読んでいったのだが、金を手放すと攻めに回ったときに、駒が不足して攻め切ることができなくなる。

② 思い切って大駒を捨てて、相手陣に切り込んでいく手。相当有力な変化でぎりぎりまで相手玉を追いつめることができる。しかしあまりにも難解で、読みきることができない。相手が一つでも間違えてくれれば、一気に勝負がつくが、完璧に受けられれば逆にこちらが負けになる。

③ 無理をせず、相手の香車を取って持ち駒を補充する。手番を握ったときに、相手陣を潰すことができそうだが、その前に自陣に殺到されてしまう。相手の攻撃をふりほどくのは、できそうにない。

①の変化、②の変化、③の変化と読んでいくが、どれも勝ちになるとは思えない。そしてまた①の変化を深く読み：：：と同じことをなんども繰り返し、なかなか次の一手を指すことができなかつた。

違う。将棋盤の中には必ずたった一つの正解が隠されている。自分はそれにまだ気づいていない。

『わからない』

将棋と対峙していると、必ずここにたどり着く。もう論理的には考えられない。それでも留まることは許されない。持ち時間が切れる前に、右脳も左脳もフル回転させて、自分が進む方向を決断しなければならぬのだ。

映美はふと外を見た。向かいのマンションの三階では、女はソファに座っていた。目の前のテーブルには洗面器が置かれ、左手をその中に入れていた。考え事をしているのだろう。女は動かない。何かはわからないが右手に握られたものが、太陽を反射して時々光っている。カミソリに見えないこともない。

映美は立ち上がると対局室から出た。階段を降りると二階の廊下に俊之がいた。

「トシ君。携帯もってる？」

「あるけど、電話するの？」

「うん。ちよつと気になることがあつて」

「何考えてるんだよ。指し手を教わってると思われるだろ。誰に用事があるんだよ」

映美は俊之の手を引き、階段横のテラスから、向かいのマンションを見た。

「三階の真ん中の部屋なんだけど、女の人がソファ座り込んでいるでしょ」

「：：：わかつた。それが？」

「あの人様子が変なのよ」

「別に普通だろ」



「私、ずっと見てるんだけど、絶対へんだよ。自殺しようとしてるんじゃないかな」

俊之がさらに不機嫌になった。

「いい気になりすぎているんじゃないか」

「……」

「今映美ちゃんがいる舞台に、立ちたくても立てない奴がいっぱいいるんだぜ。そういう連中が、どう思うでこの将棋を見ているのか、考えたことがあるのか？ 失礼だよ。自分が破ってきた相手に対して」

「……」

「そして将棋に対して……もっと指し手に集中しなよ」

「……ごめんなさい」

「今日は最後まで見ているから。頑張れよ」

「ありがとう」

やはり俊之には全てを見透かされると、映美は恥ずかしさを感じながら三階に続く階段をのぼっていった。温厚な俊之が厳しいことをいうときは、たいてい映美が間違っている。反発してけんかになることも多いが、いつも奇妙な安心感をおぼえるのだった。

もういちど将棋に対して謙虚になろう。

対局室に戻った映美は、盤のすみからすみまで眺め、一つの駒と対話していった。

角行が、敵の駒に囲まれて身動きできずにいる。適切な場所に配置されれば大きな力を発揮できるのに、対局者がそれを使い切れずにいることを、彼女は不満に思っていた。

香車と桂馬は戦いとは関係ない盤面のすみに置き去りにされたままだ。こんなことなら相手に取られてしまいたい。そうすればもっと自由になれるのに、と彼らは泣いている。

銀将は前線に進出し、まさに相手陣に入っというとしている。戦いの起こっている地点の、一番花形の駒であることに彼は得意げであるが、援軍の力が弱いことが不安のようだ。駒たちは映美に対し、それぞれ言い分を主張し始めた。映

美は彼らのわがままを我慢強く聞いた。駒たちはまるで自分のことしか考えない猫のようだ。将棋は決して殺し合いのゲームではない。四十枚の駒と共に始まり、四十枚の駒と共に終わる。一枚も欠けることはない。相手に取られた駒は決して死ぬわけではなく、その瞬間から相手側の一員となり自分に向かつて攻めてくる。駒は対局者に忠誠を誓っているのではなく、よりよい条件を出されたらすぐにでも自分を裏切る。彼らに愛されるにはどうすればいいか。それは自分から愛することだ。駒のひとつひとつを愛し、そしてなによりも対局者を愛する。将棋はより深く愛したものが勝つゲームなのだ。

『内田さん。あなたは何に苦しんでいるの？』  
映美は理沙子を思った。

『あなたが答えを見つけられないように、私も答えを見つけないことができない。でも私は間違えない。あなたが間違えることも望んでいない。私はたった一つの正解を見つけるから、あなたも最善手を指してほしい。内田さん。私とあなたは力を合わせ一つの作品を作っている。どこまでも行こう。将棋という無限の海の深い深いところに。私とあなたにしか行くことのできない場所に』

そのとき将棋が彼女の前に降りてきた。

それは違うと耳元で囁いた。

映美が本筋だと思っていたものは、対局者の独りよがりの筋で、将棋が行きたい方向ではないというのだ。

それまで閉ざされていたものが開いた。それまで考えもしなかった筋の中に、

彼女は美しい世界を見た。

映美は静かに、2六に香車を打った。

11

『守るんだ内田。ここは我慢して△3二金だ』

杉浦はモニターに写る理沙子に強く念じた。そうすれば自分の思いは必ず届き、また苦しみを少しは分かち合えると信じているのだ。

杉浦が理沙子と初めて会ったのは十四年前だった。

江戸時代から続く料亭を経営している内田という男がいた。

無類の将棋好きで師匠である板倉九段と交流が深く、将棋祭りやタイトル戦の誘致には必ずかかわるパトロンの存在だった。

ある日内田が板倉のもとに九歳になる娘を連れてきた。上の三人の息子に、県内にある三つの店舗を継がせ、末っ子の娘は棋士にしたいと言うのだ。それが理沙子だった。

当時十六歳で二段だった杉浦は、理沙子の指導係になると命じられた。板倉などは理沙子に対して下にも置かない扱いだだったが、杉浦は容赦しなかった。

理沙子が将棋を愛していないことは杉浦はすぐにわかった。将棋と父親を心の底から憎んでいた。彼女が将棋を指すということは、父親の道楽でしかなかった。そんなよこしまな気持ちで将棋を指す理沙子には許せなかったのだ。

板倉一門の研究会に初めて理沙子が参加した日に、杉浦は理沙子に宿題として、木村義雄十四世名人の名著である『将棋大観』の飛車落ちの章をすべて覚えてくるように命じた。次の週、理沙子は将棋盤を使わずにその棋譜を暗唱したことは周囲を驚かせたが、杉浦はさらに一手一手の意味や、変化を質問し、答えられないと容赦なく罵倒した。

来る日も、来る日も、杉浦は理沙子につらくあたり、一人の人間を否定するために思いつく言葉は全て浴びせた。

理沙子もまた黙ってはいなかった。どんなことを言われても何もこたえていないという顔をして、杉浦に自分の感じたものより二倍の痛みを与える言葉を投げ返してきた。

理沙子はいつでも強く、そして誇り高かった。杉浦をはじめとする周囲の人間は自分よりも劣った人間なのだという考えを理沙子は決してやめようとはしなかった。

理沙子は将棋をやめるべきだと、杉浦はいつも思っていた。愛せないままそれを仕事として続けるならば、自分だけでなく、周囲でそれに関わる全ての人間が不幸になると考えていたからだ。

何年かたってから杉浦は気がついた。理沙子にとって、憎しみこそが生きるためのエネルギーになっっているということ

を。  
杉浦は理沙子が泣く姿を今まで一度しか見たことがなかつ

た。

半年前の天童桜花戦で映美に三連敗して破れた後、杉浦は研究会で理沙子に総括をさせた。第一局から第三局まで全ての棋譜を並べさせ、なぜそんな手を指したのか、なぜ悪かったのか、いかに自分が愚かな人間なのか十人以上いる板倉一門の前で語らせたのだった。それは理沙子にとって生まれて最大の屈辱的な出来事だった。

「お前は将棋をなんだと知っているんだ！」

いままで何度も言ってきたセリフだった。そのとき珍しく理沙子は言い返してこなかった。杉浦はさらに追いうちをかけた。

「お前には才能がないんだよ」

そのとき理沙子が泣いた。杉浦にとって生まれて初めて見る理沙子の涙だった。

「……わかっています」

「……」

「私に才能がないことなんか、だれよりもわかっている」彼はまだ理沙子とあったばかりのころ一つの誓いを立て、それをいまだに忠実に守り通している。その事は誰にも言うていないが、理沙子は気づいているかもしれない。

杉浦は三十年生きてきて、一度も女を抱いたことがなかった。

理沙子は次の一手に長考を続け、一時間近く残されていた持ち時間は十分に切った。

この局面は勝ち急いではいけない。

12

理沙子にとって▲2六香は意外だった。考えていなかったわけではない。玉頭を攻めるこの手は、確かに気持ちが悪いがやや迫力に欠け、攻め合いに出れば自分の一手勝ちになると理沙子は呼んでいたのだ。

ここで考えられる応手は二通りある。△5九龍と映美の攻めを無視して勝負を決めにいく手と△3二金と受けに回る手。

「△5九龍の変化を檜井さんが読んでいないわけがない。それでも▲2六香と指したということはきつと自分の読みに穴

があるのだ。それにここで踏み込んでいき、先手玉を寄せ切る事ができないければ、一気に勝負をつけられることも考えられる。△3二金と受けに回っても、こっちが不利になるわけではなく、まだまだ長い戦いになる。：：：しかしここで勝負に出なければ、自分に勝機はないかもしれない。

こういうことは考えられないだろうか。櫛井さんが形勢を悲観して、すでに形作りに入ったのだと。：：：それはありえない。だったら▲2六香以外にも応手があつたはずだ。

△5九龍と指した後、▲7八銀と受けに回るつもりだろうか。それなら勝負がつくのはまだまだ先になる。しかし攻めに出る構想の非を認め、謝ってくるなどというのは櫛井さんの棋風ではない。例え誤算に気づいたとしても、自分の言いは通そうとするのが彼女の将棋だ。

：：：櫛井映美が読んでいないわけがない。：：：いや、彼女が間違いをおかすはずはないと必要以上に恐れるあまり、自分から崩れてしまうことはよくあることだ。△5九龍は気づきにくい手だ。たとえ櫛井さんであっても発見できないとしてもおかしくはない』

理沙子はもう一度△5九龍と攻め合いに出る手を念入りに読んでみた。なんと読んで自分も自分が勝ちになるとしか思えなかった。もしも自分の読みから落ちていいる手があるのなら、それを知りたいような気がする。今いる場所から遠く離れた世界をのぞいてみたい。

狂気へと続く入口が見えている。そこに入っていけば、自分はまだ少し強くなれることがわかっていいる。しかし二度と戻れなくなるような気がしてあと一歩のところまで足がすくんでしまうのだ。

「内田女流三段、残り十五分です」

記録係が淡々と告げた。自分に残された時間は永遠にあるわけではない。限られた時の中で決断しなければならぬのだ。次の一手でこの将棋の勝敗が決まる。自分の人生が決まる。

わからぬ。私にはどうしていいかわからない。  
教えてください。杉浦さん：：：。

「……杉浦さん」  
「え」

理沙子はあわてて顔をあげた。映美は一瞬理沙子の方を見たが、すぐに申し訳なさそうに下を向いた。聞かれてしまったのだ。一番知られたくないことを、一番知られたくない人間に。理沙子の心の底から怒りが込み上げてきた。

「勝負」

理沙子は左手で龍王りゆうをつかむとそれを高く上げ、映美の身体に一番近いマスに叩きつけた。盤がまっぷたつに割れるのではないかと思えるほど大きな音が部屋中に響いた。  
後手△5九龍。

13

やはり大方の予想通り理沙子は勝負手を放った。これから数手先には決着が着くことになる。映美が放った▲2六香は玉の頭から攻めてくる怖い手だが、しのぎきれると判断した理沙子は攻めあう手を選択した。お互いに斬りあうことになり、一手でも先に相手の玉にたどり着いたほうが、このタイトル戦を制することになる。

「内田さん攻めに出ました。魂身の勝負手ですねえ」

「どうなんでしょうか」

「いやあ、ずっと考えているんですが、わからないです。それほど難しい局面ですよ」

テレビの向こうで花岡と五反田が興奮気味に話している。研究を続ける棋士たちの熱も上がっていき、膨大な変化をしらみつぶしに検討している。記者たちもその周りに集まってきた。広い部屋の中でそこだけが異様な熱気に包まれていた。

「△4二銀と受けて、そこでどうする」

「▲3一銀は」

「玉で取られて王手が続かない」

「▲5四桂は」

「△5二歩で切れる」

俊之もその後ろに立ち、棋士たちの動かす局面を眺めた。終盤になっても難解な将棋でどちらが勝っているのか俊之には読みきることができなかつた。

杉浦はあいかわらず輪から離れたところに立ち、モニターを睨みつけていた。俊之は見逃さなかつた。理沙子が△5九龍を指した瞬間、杉浦が天を上げてうめき声を発したことを。彼にはきつとわかつているのだ。数手先に映美が勝ちを決める手を放つことを。

「内田さんの放つたこの△5九龍以下ですね、▲2三香成り、△同玉、▲2四歩、△同銀、▲8二竜、△4二銀と進むことが予想されますが、この時に檜井さんにいい手があるんじゃないか……」

必然的に六手先までは一本道に進む。問題はその次の局面。映美が手番を握り、そこで後手玉を寄せる必殺の絶妙手があれば映美の勝ち。なければ理沙子の勝ちが決まる。

研究陣によって六手先の局面が並べられ、あらゆる寄せ筋が考えられているが、どの変化もうまい受けがあり、後手玉をしとめることができない。

「どうなってるんだ、これ」

「寄り筋はないぞ」

「やはり内田が勝ちか……」

誰にも自信を持って結論を出すことはできなかつた。

一人離れたところに立っていた杉浦がゆっくりと輪に近づいてきた。彼に睨まれた棋士たちは思わず駒を動かす手を止めた。

「3五桂」

杉浦は静かに言うのと再び踵を返した。

敵の歩の前に桂馬を打ち、ただで捨ててしまう。一見無駄な手。

「え？」

大方の者たちと同じく、俊之にも杉浦の言った手の意味がわからなかつた。桂馬を渡したら簡単な三手必至がかけられてしまう。それこそ絶望的ではないか。

「あ……寄ってる」

棋士の間から声が上がった。

「嘘だろ……」

棋士たちは再び活発に手を動かし始めた。

すぐに大きな声があがった。「これ決まってるぞ。▲3五桂で櫛井勝ちだ」

▲3五桂と打つと、△同歩と取られてしまう。しかし歩が一マス動いたことにより、それまで歩がいた3四の地点にスペースが開く。ほんの少しの隙間から陽が差した。その一点にめがけて映美の駒が次々と殺到してきて堅牢な矢倉城は間もなくガラガラと音を立てて崩壊していくことになるのだ。その後の変化も複雑だったが、どう逃げても数手先には内田玉は捕らえられることが確認された。

「▲3五桂で寄り筋ですか……」

この変化は大盤解説場の二人にもすぐに伝えられた。

「櫛井さん勝ちですか」

ころなしか五反田の声は嬉しそうな顔をしている。解説の花岡は「勝負手の5九竜が敗着になりそうですね」と結論付けた。

しかし本当に映美は▲3五桂に気づいているのだろうか。六手先の局面で彼女がどう指すのかに注目が集まった。

14

映美はわずかに残された持ち時間を使い切るまで考えると、右手を張り詰めた糸のようにまっすぐに伸ばし、▲2三香成りと理沙子の玉頭から迫ってきた。秒読みの中で、大きくはないがはつきりとした駒音は、理沙子の体の中の奥深いところを揺さぶった。そのとき理沙子は決して入ってはならない破滅へと向かう道に、今自分は足を踏み入れたのだとはつきりと予感したのだ。

「この順だと私の勝ちになるはずよ。違うの？」

理沙子はこの後の展開を読み直してみた。映美が攻めがしばらく続き、ある局面で理沙子はそれを手抜きして攻めに転じ、先手玉を寄せに行く。一手の差で後手の自分が勝つ……。何度も読み直してみたが結論は変わらなかった。それ以外の手はまったく思いつかない。

自分の発想と想像力を超えた妙手が用意されていて、△5



九龍を待ち構えていたとでもいうのか？ 勝負手を放ったと思っただけなのか？

理沙子、七分考えて△2 三同玉。映美は間髪いれずに▲2 四歩。

「どうしてもっと時間を使わないの？」

持ち時間がなくなったとはいえ、五十九秒間は考えることができる。明らかに映美は自分の知らないことを知っている。

理沙子は今ぬかるんだ細い道を歩いている。暗くて足元は見えない。追い求めていた獲物の匂いを間近に感じるが、そこに向かう途中には大きな穴が開いているらしいのだ。別れ道はなく、後に戻ることもできない。自ら穴に落ちるために進んでいき、自分という人間が否定されるのだ。

理沙子、四分考えて2 四同銀。映美は間髪いれずに▲8 二龍。

「どうなるの？ 知らないのは私だけなの？」

控え室の棋士たちは、もしかしたらすでに檜井勝ちと結論を出しているのだろうか。テレビを通じて日本中が自分を馬鹿にしているのだろうか。

理沙子、二分考えて△4 二銀。

映美は次にきつと▲1 四歩と指してくる。その端攻めには二手の余裕があるので手抜きをして、△8 五桂以下詰めろを続けていけば、自分の攻めをふりほどくことはできないはずだ。

問題の局面を迎え、映美の手が止まった。

理沙子はおびえた。次の一手で自分は審判を受ける。

記録係は淡々と秒を読んでいく。

「十秒：：：二十秒：：：三十秒：：：」

理沙子にとつて一分に満たない時間が永遠に感じられた。

「四十秒：：：五十秒、一、二、三、四：：：」

映美の右手が動き、駒台に乗っていた桂馬をつかんだ。

「桂馬？ 嘘：：：」

映美が静かに3 五に桂馬を打った。

黒板にびっしりと書かれていた複雑な数式が一瞬で消されてしまったように、理沙子の頭の中は真っ白になった。何が

起こったのかしばらく理解できなかった。

映美は勝ちを確信した。▲3五桂の応手は何通りかあるが△同歩と取る手が最善だろう。そこで▲3四歩と叩く。以下いろいろなまぎれがあるが、詰める詰めるとどこまでも迫っていくことができる。

記録係に頼んでおいた氷水を一口飲んだ。ちょうどいい冷たさにとけていて、疲れた脳に染みわたり細胞のひとつひとつをもみほぐしてくれた。

映美は窓から外を見た。

女はソファに座っている。目の前のテーブルには洗面器が置かれている。左手をその中に入れていいる。女は動かない。さつき見た時と全く同じだ。

映美は確信した。彼女は手首を切ろうとしている。

理沙子を見ると盤に覆い被さるように、前のめりになって考え込んでいる。いつも背筋を伸ばしている彼女にしては珍しい。▲3五桂は読んでいなかったのだろう。だったら複雑な変化を読みきるためにすぐには次の手を指さないはずだ。

映美は記録係に残り時間を確認した。

「内田女流三段残り七分、榎井女流名将はありません」七分と六十秒。すなはち八分後に▲3四歩と指していなければならぬ。

映美はもう一度マンションを見た。間違いない。彼女は死のうとしている。

映美は立ち上がると対局室から出て行った。

一、二、三、四、五、六……頭の中で秒読みを開始する。持ち時間は四八〇秒。

草履を履き、廊下に敷かれた絨毯の上を走る。階段を降りて、一階のロビーにたどりつく。そこまで四十二秒だった。入口を出ると目の前にマンションがそびえていた。あそこにとどろいて、三階に上がるまで百二十秒、往復で二百四十秒。家に入って百六十秒で彼女を助け出し救急車を呼べるだろうか。

そのとき映美は気がついた。理沙子が七分間まるまる使う

とは限らない。理沙子が次の手を着手して五十九秒以内に指さなければ時間切れ負けになってしまう。

考えているひまはない。映美は走り出した。一人の人間が死のうとしている。いくら勝負が命がけだといつても、一局の将棋が一人の人間の生命よりも、その後の人生が持っている可能性よりも、その人を愛する人たちの幸福よりも、重いなんでいうことはありえない。

着物を着ているため歩幅を広く取ることができない。草履のはなおが助けてくださいと悲鳴をあげている。

百五十一、百五十二、百五十三、百五十四、百五十五……。マンションにたどり着いた。エントランスに入るとエレベーターはすぐにわかった。二台あったうちの一台が扉を開けていた。

「すみません。待ってください」

男物のツイードのジャケットを着たあごの長い女が走ってくるのが見えた。彼女は重そうな荷物を持っていたが、映美は心の中でわびながら『閉』ボタンを押した。

エレベーターが三階にたどりつくまでに、ホテルで見えていたときのマンションの姿を思い浮かべた。彼女の部屋の位置は棋譜にすると9の十三。だからエレベーターを降りて左に走り、三つ目の部屋がそうだ。

とびらが開き目指す部屋まで走る。表札はかかっているがドアは開かない。映美は両隣の部屋の呼び鈴を押し、ドアを叩いた。外出中なのか反応がない。

「お願いだから、誰か開けて！」

映美の叫び声はフロア中に響いた。

「大声出さないでいただけます!？」

不愉快そうな声の主は、エレベーターに乗せるのを拒否したあごの長い女だった。

「隣の人が自殺しようとしています。私外から見ただけです」  
あごの長い女はあわてて鍵を開け、映美を中に入れた。部屋を抜け、ベランダに出て、非常壁を破る。

中で若い女がぐったりしているのが見えた。ガラス窓には鍵がかかっている中に入れない。  
「これを使って」

振り向くと白いあごの長い女が金槌を映美に渡した。ガラスを思い切り叩き割って中にはいった。

洗面器の中の液体は真っ赤に染まっていた。部屋中に充満している悪臭。これほど大量の血を見る事は読み筋にはなかった。映美は立ちすくみ、失神しそうになった。

「私にまかせて。看護師なの」

あごの長い女がはハンカチを取り出しながら彼女に近寄ると、左手首の周りをきつく縛った。

「救急車呼んで。早く」

あごの長い女は映美に命じると、若い女の耳元で「木下さん。しっかりして」と大声で呼んだ。

映美は茶だんすの上に置かれていた電話機を見つけて――九番を回した。

「火事ですか？ 救急車ですか？」受話器の向こうの声があった。

「女の人が手首を切ったんです。すぐ来てください」

「住所を言ってください」

「横浜市：：：」

ここはいったいどこなのだ？ 何区さえかもわからない。

「紅葉坂のベイサイド・ハイツ。309号。木下」

あごの長い女が言った。どこまで頼りになる人なのだろう。

「紅葉坂のベイサイド・ハイツ。309号。木下です」

映美は受話器を置くと、あごの長い女を見た。

「大丈夫よ。まだ間に合うわ」

二百九十一、二百九十二、二百九十三、二百九十四：：：。

映美の頭の中では秒読みは続けられている。

「私、どうしても行かなくちゃいけないんです。後はお願いします」

「ちよつと、待ってよ：：：」

下駄箱にスニーカーがあるのを見つけた。サイズは二三・五。映美のサイズと同じだ。

「この靴お借りします。後で必ず返しますので、その人起きたら伝えてください」

映美は部屋を出ると再び走り出した。頭の中で将棋盤を再現する。▲3五桂には△同步と指す一手。

三百六、三百七、三百八、三百九、三百十……。  
四百八十を迎える前に対局室に戻り、▲三四歩と打てば自分  
は勝てる。

16

三五に居座る桂馬は、直接見ることができないほど強い光  
を放っていた。

「いつからこの手を知っていたの？」  
気づくのがあまりにも遅すぎた。遙か以前にすでに勝負は  
ついていたのだ。それまで手の届くところにあると思ってい  
たものと理沙子の間には、やはり大きな壁が立ちふさがって  
いるのだ。もしかしたら、それを超えることは一生できない  
かもしれない。

全ての変化を検討した。どれもぴつたりと詰んでいる。す  
なはち一枚でも駒が欠ければ成立しないものが、成立してい  
るのだ。▲二六香からの一連の手順は、いびつなところが微  
塵もない球体のように完璧だった。将棋の神様が作曲したメ  
ロディは、理沙子ではなく映美の唇を通り抜けて将棋盤の隅  
から隅まで行き渡った。それまで絶望していた駒たちは重要  
な役割を与えられ、いまとなつては敵、味方関係なく全ての  
駒が歓喜の声をあげて祝福している。

「もう、逃げられない。私はどこにも逃げられない」

最初から、……振り駒で後手と決まったときから……自  
いや、生まれて初めて将棋の駒に触れたときから……自  
分がこの場所で捕らえられることはすでに決まっていたのだ。  
いつでも一人なのだと思っていた。誰の力も借りず、自分  
ひとりだけで人生を切り開いてきたのだと勘違いしていた。  
そうではない。誰かが敷いたレールの上を、誰かの力によつ  
て動かされて来ただけだった。全ては予定されていたことな  
のだ。

「次の手を指せ。相手は将棋盤の前に座っていないではない  
か。お前が指せば勝ちになるのだ」

理沙子は杉浦の声を聞いた。  
こんな屈辱があるものか。実力の違いを多くの人間が見守  
る前でさらしておいて、そしてなおかつ置き去りにするなん

て。

「内田女流三段。持ち時間を使いきましたので、これからの指し手一手六十秒未満でお願いします」と記録係が告げた。

「私には指せない」

指せ！

「指せない！」

「十秒：：：：」

指せ！

「嫌。絶対に嫌！」

「二十秒：：：：」

指せ！

「こんなの檜井さんに勝ったことにならない」

とにかく指せ！ なんでもいいから指せ！

「五十秒、一、二、三、四、五、：：：：」

誰でもいい。誰でもいいから今すぐ自分を刺し殺してほしい。

「：：：：お願いだから助けて」

「六、七、八、九：：：：」

理沙子の左手が動いた。打たれた桂馬を歩で取ると、駒台の上に叩きつけた。桂馬は若干はねると畳の上に落ちた。理沙子はそれを拾おうとしなかった。

記録係は『三五同歩』と記した。

「十秒：：：：二十秒：：：：」

今度は姿を見せない対局者に向かって秒が読まれた。

理沙子はいつまでも震えていた。

17

四百十七、四百十八、四百十九、四百二十：：：：。

タイムリミットまで六十秒を切ったとき、映美はホテルの階段を昇り始めるところだった。

わき腹はずつと痛く、左胸は心臓が飛び出してきそうなほど早い鼓動を打っている。学生時代にもこんなに走った事はない。なかつた。

本当に死ぬんじゃないだろうか。自殺しようとした人間を

助けて、自分は死んでしまうという笑い話みたいなことが映美の頭をよぎったが、彼女は挑戦者を迎えうつ立場にいる人間である。例えそうなるうとも、立ち止まることは許されない。

一階から二階まで二十五秒かかった。

二階から三階まで二十八秒かかった。

四百七十三、四百七十四、四百七十五、四百七十六……。

最後の直線。対局室に向かう長い廊下を走る。

終局間近と判断したマスコミたちが、入口付近に集まっていた。まるで猟犬に追われるイノシシのように猛烈な勢いで突進してくる映美から逃げるように、彼らは道を開けた。

部屋の中から記録係が秒を読む声が聞こえてきた。

「五七、五八、五九……」

映美はスニーカーを脱ぎ捨て、対局室の襖を開けた。

きつと理沙子は△3五同歩と取っている。そこで▲3四歩と打てばこの将棋は終わる。

今年もまた、自分が女流名将のタイトルを防衛することになる。

「六十……」

記録係が冷徹に秒を読んだ。時間の流れるはやさだけは、やはりここでも万人に平等だったのだ。

時間切れ負け。

映美は思わずその場にしゃがみこんだ。激しく息をしながら、しばらく動くことができなかった。

「以上、百十四手を持ちまして内田女流三段の勝ちでございます。ありがとうございますございました」

理沙子は映美に目もくれなかった。ただ将棋盤に対して「ありがとうございますございました」と一礼すると、身の回りの荷物をまとめはじめた。

やがて映美も立ち上がると、将棋盤の前に座った。

「負けました。ありがとうございます」

まもなくマスコミがなだれこんできて、理沙子と映美にフラッシュを浴びせた。

「内田さん、おめでとうございます。女流名将になった心境を」

理沙子は質問に答えず、立ち上がるとそそくさと部屋から出て行った。

「檜井さん、いったいどこに行ってたんですか？」  
マイクが映美に向けられた。

いま自分はどんな姿でいるんだろう。見苦しい格好でテレビに映っているのだろうか、などとぼんやり考えながら「……申し訳ありませんでした」と映美はか細い声で言った。

狐につままれた気分とはこういうことをいうのだろう。俊之は立ち上がることさえできなかつた。

モニターでは五反田が理沙子を祝福している。こんなときでもいつもと同じように笑えるのはさすがにプロだなと俊之は思った。

「最後はハプニングがありました。最後の最後まで手に汗握る名勝負でしたね。内田理沙子女流名将が誕生しました。これからの女流棋界からますます目が離せなくなりましたね。このへんでお別れです。花岡先生ありがとうございました」

「ありがとうございます」

「それでは失礼致します。さようなら」  
『S H O G I 専門チャンネル』の中継は終了し、モニターの画面はコマーシャルにかわった。

会場から大きな拍手がわき、A Dたちの「お疲れ様でした」という声が俊之のところにも聞こえてきた。

やがて五反田が控え室に入ってくると、それまでの清楚な顔は一変し、体に取り付けていたマイクとイヤホンを取り外し、思い切り床に叩きつけた。

「何やってんのよ！ ナライちゃんは！」

五反田の声は、ふすま一枚で隔てられている解説場にも聞こえたらしく、まだ残っていた観客から笑い声やどよめきがおこった。

眠る気力さえ残っていなかった。

19

18



理沙子は着物姿のまま、床にしゃがみこみ、壁にもたれながら窓から外をぼんやりと眺めていた。

対局が終わってから、逃げるように自分の部屋に入りこみ、こうして何時間も過ぎようとしている。

ホテルの前に立つマンションが見えた。ほとんどの窓にはあかりがともっている。あの中にはきっと女がいる。彼女は仕事から帰ってきた愛する男を迎え、自分がこの世に送り出した子供たちの笑い声に囲まれている。そこにはきっと愛情と優しさが当たり前の日常として存在している。

こんどこそ……：本当にこんどこそ、将棋なんかやめてしまおう。

誰かの妻になり、誰かの母親になり、変わり映えしないけれど、誰も傷つけずに穏やかな毎日を過ごそう。それは相手の王将を取り合うことに身を削ることなんかよりも、遥かに価値のある人生だ。きっとそうだ。そうに決まっている。

しかし理沙子は知っていた。明日になれば、彼女は再び将棋盤の前に座っていることを。

誰かの足音が近づいてきた。それは彼女の部屋の前でもまり、静かにドアをノックした。理沙子は音のするほうを見た。あの人だろうか。あの人が私に会いにきてくれたのだろうか。

「俺だ。杉浦だ」

理沙子は立ち上がるとドアまで走って行った。対局で精も魂も使い果たし、残っていない力を振り絞り、体全体を使ってノブをつかんで引いた。

理沙子は背筋を伸ばし、目の前の杉浦をまっすぐに見つめた。

長い黒髪は乱れ、せっかくの和服もしわだらけだった。

打ちひしがれて、ぼろぼろになって、それでも彼女は立っていた。

もう、いいんだよ……。杉浦は小さな笑みを作ると、理沙子に頷いた。

理沙子は姿勢を崩さなかった。しかしいつも彼女につらくあたる杉浦の優しい表情を見ると、一瞬で彼女の目は真っ赤になった。そして髪の毛と同じように黒い瞳から、大粒の涙が次から次へと、とめどなくあふれてきた。

「全ての指し手に：：：お前の魂がこめられていた」

理沙子はもうこれ以上自分を押さえることができなかった。  
「うわあああああああ」

崩れるように杉浦の胸に抱きつき、フロア中に響き渡るほどの大きな声で泣いた。

「素晴らしい、将棋だったじゃないか」

杉浦は理沙子を強く抱きしめた。

20

吉田自らがビール瓶の栓を開けると、それを俊之のグラスに注いだ。押し頂くようにそれを受けた俊之は、一気に飲み干した。続けて映美がビール瓶を取り、吉田、紀美子、俊之、そして自分のグラスにビールを注いだ。

吉田のアパルトで、俊之の送別会が行なわれた。

俊之は座布団から降りると三人に向かって深く頭を下げた。「僕の努力と才能が足りず、結局四段になることができませんでした。しかし子供の頃からいまままで、この場所で吉田先生に教わったことや、紀美子さんや映美ちゃんと時間を過ごせた事は、決して忘れません。ありがとうございました」

次に吉田が俊之に頭を下げた。

「トシが棋士になれなかったのは、わしの責任や。本当に申し訳ない」

紀美子は饞別の入った封筒を俊之に渡し、小さな声で「これから大変だろうけれどがんばって」と言った。

しめやかだったのは最初だけで、すぐに紀美子と映美が作った料理が並べられた。とんかつがあつて、刺身があつて、てんぷらがあつて、俊之の好きなものがこれでもかというほど用意された。

料理が豪華であるという以外、食卓はいつもと変わらなかった。酒に酔った吉田が精神論を唱えだしたり、映美と俊之が議論を始めたり、紀美子の話す思い出話に大きな声で笑いあつたり：：：。子供のできなかつた夫婦がいて、彼らを親のように慕う男の子と女の子がいて、今までの十一年間そうだったように、これからも何も変わらないと思わせてくれるありきたりな時間は、優しく流れていった。

酔い覚ましを兼ねて、四人で銭湯に行くことになった。歩  
きなから映美と俊之は目隠し将棋をした。頭の中に将棋盤を  
思い描き、棋譜を言い合いながら将棋を指すのだ。

先手の映美が「▲7六歩」。俊之が「△3四歩」。映美が「▲  
2六歩」。俊之が「△4四歩」……。俊之はいつもの四間飛車<sup>しけんびしゃ</sup>

で、映美もいつもの5七銀左からの鷺宮定跡<sup>さぎのみやじょうせき</sup>。一手違いの熱  
戦は、結局映美が逆転で制した。

横で聞いていた吉田が口を出す。

「△7九角成りと切ったところな、ゆっくり△6七とだった  
らトシが勝ってたんじゃないか」

「私もそっちのほうが好きだった」

「そうか。△6七とにしようか迷ったんですけどね……」  
いつものように女二人は長風呂で、俊之と吉田は目隠し将  
棋を指しながら待った。一局終わる頃映美と紀美子が出てき  
て、みんなで牛乳を飲んだ。

いま自分は暖かい部屋の中にいる。しかしもう出て行かな  
ければいけない。外ではきつと強い風が吹いている。自分の  
力では歩けないかもしれない。もしも傷ついたり、疲れたり  
したらこの場所に休みにこよう。そのときこの人たちはきつ  
と「俊之、頑張ったな」とほめてくれるだろう。

「これからも時々遊びに来てもいいですか」

俊之が言うと、ほかの三人から何バカなことを言ってるん  
だという口調でせめられた。

「当たり前じゃん。いつでもおいでよ」

「将棋やめても、トシ君はいつまでもうちの子なんだからね」  
「水臭いことを」

帰り道は寒かったけれど、珍しくいくつもの星座がはつき  
り見えた。東京でも時々こんなふうな空気の澄んだ夜がある。  
十一光年離れた星から地球を見たら、入門したばかりの自分  
と映美が見えるのかもしれない。綺麗な空だった。

泣きたくなるほど綺麗な空だなんて思っていたら本当に泣け  
てきた。

あれほど将棋が好きだったのに。子供の頃から名人になり

たくて、それ以外のことはすべてあきらめて、将棋だけを頑張ってきたのに……。

「もうだめなんですね……。僕はもう将棋指しにはなれないんですね」

俊之はその場にうずくまり、大きな声をあげて泣いた。

紀美子がすぐに駆け寄って俊之を背中から抱きしめた。「ごめんね、トシ君……。ごめんね」東京の母親は、東京の息子に顔を押し当てて泣いた。

それを見ていた映美が、続けて吉田までもが泣き出した。

星降る夜の下、四人は泣きながらアパートまでの道のりを歩いた。

21

数日後、映美は横浜に行き、自殺を図った女性、木下小百合のマンションを訪れた。

小百合は相変わらず薬を服用しているものの、近日中に仕事にも復帰できるほど回復しつつあるようだ。

映美は無断で借りていたスニーカーを返し、通されたリビングから対局場だったホテルを見た。ほんの数日前の出来事なのに、古戦場で遠い昔の争いを思い浮かべるときのように、すでにリアリティを失っていた。あの場所から着物姿でここまで走ってきたのは、自分の姿をした他人のようだ。

「大事な対局を私がめちゃくちゃにしてしまったんですね。本当にごめんなさい」

小百合は映美にアールグレイティと手作りのアップルパイを出した。美人なのだが、やせすぎの体と不自然に大きな鼻が全体のバランスを失っているような印象を与えた。左手に巻かれた包帯も痛々しかった。

「強い人が勝って、弱い人が負けた。そういうことですよ。でも元氣そうですね。安心しました」

「……誰にも見つからないような山奥とか、そういう他人に迷惑のかわらないところで死ねばよかったですね」

「そんな……。なに言ってるんですか。死ねばいい命なんてひとつもないはずですよ」

「生きていればいつかいいことがあるよとか、そういう無責

任なことは言わないでくださいね」

「……」

「こうなることは最初からわかっていました。どんな男だつて私みたいな女は嫌になるんですよ」

「世界中のどこかにひとりぐらい……」

小百合がさえぎった。映美の言葉に聞く耳を持たないというふうだった。

「もうこれ以上進んだら元には引き返せないっていう場所があるんですよ。私はそれを若さにまかせて踏み越えてしまったの。簡単にもとに戻れるって思ってた。でも、踏み越えた時のことを知っている人が何人もいるの。だから私はもう踏み越えたまま生きていくしかないの……助けてもらっておいてこんなことというのは失礼ですよ。別の話しましょ」

映美は窓の外に目を移し、ホテルを見た。もしもあのまま勝っていたら、▲2六香からの手順は、生涯忘れられない快心譜になるはずだった。

「木下さんがどれだけ苦しんでいるのか、理解してあげることとは私にはきつとできないんでしょうね。癒してあげられるような言葉も、私は持っていません」

「そんなこと最初から期待していませんよ。みんな私ひとりが悪いんだし」

「でも将棋だったら、教えてあげることができます」

「……将棋？」

「ええ。将棋を指しているときって、頭の中から将棋以外のことが全部消えて、自分じゃなくなることができんです。どんなに嫌なことがあっても、どんな悲しいことがあっても、将棋を指している間だけは、考えたくないことを忘れることができるんです。一日のうちでたった一時間だけでも苦しみから解放されることができれば、少なくとも生きていくことはできると思うんです」

「忘れることができるの？」

「全てを奪いさられるって、気持ちのいいことですよ」

「……そんなに面白いの？」

「指しましょうよ。将棋」

小百合は答えなかったが、ほんの少しだけその表情を崩し

た。

俊之の荷物を札幌に運ぶトラックが夕方には到着するとい  
うので、それまでにみんな荷造りの手伝いをする事にな  
った。映美は大きなリュックを持って約束の時間に彼のアパ  
ートにやってくる、吉田と紀美子もつと早い時間から来  
ていて、すでに荷物は大方まとめられていた。

中学を卒業すると俊之は吉田の家を出て、このアパートを  
借りてひとりで住んでいた。とはいっても歩いてすぐのここ  
ろにあり、同じように近くにある映美のマンションや吉田の  
部屋にはお互いに頻繁に行き来していたのだ。

表にごみとして捨てるものが集められていて、その山の中  
には映美が予想していた通り将棋関係のものも含まれていた。  
奨励会で指した将棋を全て記録した何十冊もあるノート。  
何度も並べて表紙が取れてしまった大山と中原が闘った名人  
戦の棋譜。アンダーラインで真っ赤になった定跡本や新聞の  
将棋欄を切り抜いたスクラップブック。

映美は俊之に気づかれないうにそれらを持ってきたリュ  
ックにしまった。いま俊之は、もう二度と将棋は指さないと  
思っているかもしれない。でもいつかどこかで、何気なく将  
棋の駒に触れたとき、彼はきつとその魂を揺さぶられるはず  
だ。そして自分の愛したものが、青春のすべてを捧げるにふ  
さわしい素晴らしいものだったと気がつくのだ。そのときが  
来たら、俊之がたたくなくも真剣に生きていたという証拠を彼  
のところに戻しにしようと映美は思っているのだ。

正午をすぎる頃には荷造りはほとんど終わりに近づいてい  
た。午後からは部屋の掃除をすることに決めると、「私が買っ  
てきます」という映美を制して紀美子が食事を買いに行き、  
吉田も午後の作業に必要な掃除機などを家まで取りに出て行  
ってしまった。

最後の段ボールにガムテープを止めた。六畳一間を見渡す  
と、ついさっきまで俊之の顔をしていた場所が、なにか別の  
冷たいものに変わってしまったような気がした。

「本当にいつちやうんだね」

「俺がいないと、淋しくなるだろ」

\*

「……淋しくなるね」

「そんな深刻な顔で言わないでよ。冗談なんだからさ。実家も遠くないんだし、いつでも会えるよ」と俊之は無理に作ったような笑顔で言うと、二人は黙り込んだ。

随分長い間、どちらも何も言わなかった。

映美の目の前から今失われようとしているもの、昔から彼女の一部として存在しているとても大切なもので、すぎていく時間がこれ以上自分たちの手のひらから零れ落ちないように、そんな手立てがないことは充分わかってはいるのだけれど、せめてできるだけ指と指のあいだの隙間を小さくしようと、そうするべきではないのにこの沈黙を破ることができずにいるのだった。

「先生と、紀美子さん、遅いね。何してるんだらうね」

「俺、すぐに東京に戻って来るよ。こっちで働くよ」

「……」

映美は窓を開けた。秋の空が青くて、どこまでも青くて……。

「そうしたら、俺と……結婚してくれないか」

「……」

「俺なんか、中卒で、将棋もだめで、何も取り得がないけれど、映美ちゃんだけは、失いたくないんだ」

「……」

「ずっと……ずっと、俺は映美ちゃんだけが好きだったんだ。いままでみたいに、これからも死ぬまで、俺のそばにいてくれないか」

生まれてからいままで味わったことのない衝撃が、映美の頭からつま先までを貫いた。

彼女はただ、何も言えずに、彼を見ることしかできなかった。

「迷惑だった？」と俊之はやさしく聞いた。彼はいつでも母親の羊水のように映美にやさしかった。

「そんなことない。……そんなことないよ」映美は首を横に振った。「そんなふうに考えたことがなかったからびっくりしちやって……」

「……」

「ありがとう。……映美は嬉しいよ」

「……」

「トシ君の気持ち、しつかり、受け止めるから」

「……」

「でも考えさせて」

「……」

「ちゃんと答え出す。時間作って、札幌に行って、きちんと返事するから」

「……」

「それまで待つて」

「……いままで本当にありがとう。映美ちゃんに会えて本当によかったと思ってる」

俊之は右手を差し出し、映美はそれを両手で握った。なんども触れているはずなのに、とても大きくて、あたたかくて、切なかった。

翌日の午後、俊之は札幌行きの日空に乗って東京から去っていった。紀美子が少しだけ涙ぐんだけれど、最後まで笑いの絶えない明るくて楽しい別れだった。

\*

子供将棋教室ではぼうぎん棒銀を教えた。初心者が最初に覚える戦法といわれ、わかりやすいので誰にでも指せる。ヘボ将棋の代名詞として使われることもあるが、将棋のエッセンスが凝縮されていて、もつとも優れた戦法の一つだと映美は思っている。棒銀ばかり指し続けて名人になった棋士もいるほどその奥は深いのだ。

「飛車の前に銀をすすると伸ばしていけば、▲二三銀成り、△同金と銀を取られても、▲同飛車成り。ほら相手陣を破ることができでしょ。これが棒銀の基本よ。わかったかな？」

子供たちは大きな声で「はい」と返事をした。自分はこれからどこまでも無限に強くなるのだと、子供たちは目を輝かせている。世の中にはどうしようもないことがあるというのにまだ気づいていない彼らは、小さな両手を一杯広げてこの世界にある全てのものをつかもうとしている。子供たちから学ぶべきものは多いと映美はいつも思うの



だ。

彼らの中からプロ棋士は出ないかもしれないが、もしもこれから死ぬまで将棋を指しつづけることができれば、その人生はきつと悪くないはずだ。

「あら檜井ちゃん」

連盟の廊下で五反田とすれ違った。

「五反田さん、こんにちは。今日は何ですか」

「これから山崎七段のインタビュー。いいでしょ。かわってあげようか」

映美が「かわってくれますか」と笑いながら聞いたなら「ダメー。あげない」と五反田はいじわるをする子供のよう

うに言った。

「でもよかったね、あの人。命に別状なかったんだって」

「すつかり元気でしたよ」

「控え室の誰かに行かせればよかったのよ。そうしたらあの女無冠のままだったんだから」

「また一からやり直します」

「すつかり有名人じゃん。普段来ないようなマスコミもいっぱい来るようになったし。でも、『もうお宅みたいな貧乏チャネルには出ません』なんて言わないですよ」

「そんなこと言うわけないじゃないですか」

「近いうちに檜井ちゃんの特集組むからさ。またお願いね」

「内田さんにしたらどうですか。タイトル取ったんだし」

「ゲ！ 気持ち悪くなること言わないでよ。じゃあ、また」

「どうもお疲れ様です」  
ゆらゆらと踊るように五反田は去っていった。懲りずにまた新しい恋にめぐり合ったのだと、最近いろいろなところで噂を聞く。

私も人を好きになってみようかな……と。

\*

千駄ヶ谷駅に向かう鳩森八幡神社の境内で、いつもは気に止めない棋力向上絵馬を五百円で買った。『強くなれますように』と書こうとしたが、今の映美にはもつとふさわしい言葉が別にあるような気がした。すぐには思いつかなかったので、何も書かずにかばんの中に絵馬をしまった。次の一手で歩と

歩がぶつかりあうところに自分は立っている。人生の序盤戦の重要な局面。多少長考してもいいから、最善手を指さなくてはいけない。

映美は天を仰いで大きく息を吸い込んだ。すっかり深まつた秋は神社の木々にも美しい色をつけていた。

ここのしばらくの間色々なことがありすぎて周りを見る余裕がなかったが、気がついていたら自分を取り囲む世界が真っ赤になつていたことがおかしくて、映美はくすりと笑つた。

突然厳しい視線を感じた。交差点で信号待ちをしていた理沙子が映美のことを睨みつけていたのだ。

映美は理沙子が来るのを待った。理沙子は決して視線をそらそうとせず、まばたきさえもしないように映美には感じられた。

大きな銀杏の木の下で、二人は向かい合つた。

映美は理沙子に対して深々と頭を下げた。そして理沙子の言葉を待った。

理沙子は口を開こうとしなかった。

「内田さん：：：」

理沙子は左手を大きくあげると、映美の頬に打ちおろした。ビシイ、と大きな音がした。映美は強い痛みを感じ、右の頬をおさえた。

映美が顔を上げたときには、理沙子はすでに歩き出していた。

凜として将棋会館に向かって歩いていく理沙子の姿を、映美はいつまでも見ていた。

理沙子は一度も後ろを振り向かなかつた。

了